新今昔物語

第5話

市の指定文化財⑤

一石十三仏石仏

阪奈道路の「竜間」バス停から北に入ったところに称迎寺があります。この称迎寺の境内には、高さ140センチ、幅70センチの舟形光背に、十三躯の仏像が彫刻された花こう岩の石仏があります。

仏像はすべて坐像で、三列を四段に重ね、その上に一躯をのせる一般的な配列のものです。さらに像の上に天蓋を頂いています。仏像および天蓋は、厚みのある半肉彫とされるもので、小振りながら細部についても丁寧な彫りとされています。

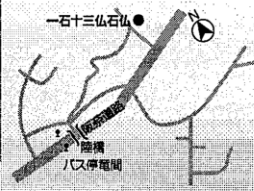
十三仏に対する信仰は、鎌倉時代のころ中国から伝わった十王の本地仏（日本の神に姿を変えて現れたとされる仏）に、室町時代中期のころ三王の本地仏が加わって成立したもので、このころから死者の成仏までの供養仏として広まっていきます。

その十三仏は、最下段向かって右から不動明王・釈迦如来・文殊菩薩、二段目左から普賢菩薩・地蔵菩薩・弥勒菩薩、三段目右から薬師如来・観音菩薩・勢至菩薩、四段目左から阿弥陀如来・阿閦如来・大日如来で、最上段が虚空蔵菩薩となっています。

像の左右下部に銘が刻まれており、慶長11年（1606）2月11日に、生前から死後のために供養をする「逆修」を目的とした講に属した45人によって建立されたものであることが分かり、江戸時代初期の庶民信仰を伝える貴重な石仏です。

（市史編纂委員　岡村喜史）

竜間所在



新今昔物語

第6話

市の指定文化財⑥

壺棺

野崎観音（福聚山慈眼寺）の本堂北側から大東の杜・飯盛ハイキング道に入り、石造九重層塔（第1話参照）を右手に見ながらさらに登っていくと展望休憩所があります。昭和33年（1958）の工事造成中にこの場所で発見されました。

壺は弥生時代後期（約2～3世紀ごろ）に作られたもので、口径22・5センチ、高さ63・5センチのかなり大型のものです。口縁部には竹管文や波状文、またその端部には刻目を施すなど装飾性豊かで、体部にはヘラミガキ調整と呼ばれる手法が丁寧に施されています。

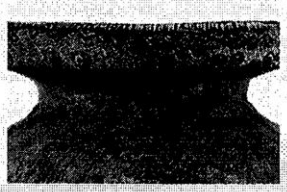
発見当時、壺は花こう岩の石を蓋にした状態で出土し、内部には複数の幼児の人骨があったと伝えられています。標高約78メートルの非常に眺めのいい場所に埋葬されていることから、おそらくこの地域の有力者が、わが子を丁重に埋葬したものと思われます。

弥生時代の近畿地方では周辺を溝で区画した方形周溝墓と呼ばれる墓があり、その区画内や溝には壺を使用した埋葬例が多くみられます。家族墓との性格から幼児を埋葬するために壺を使用することはかなり一般的な方法であったと思われます。

市域ではほかに中垣内遺跡で弥生時代中期（前2～1世紀ごろ）の壺棺がありますが、この時代の葬送観念を知る上で貴重な資料といえます。

（生涯学習課）

歴史民俗資料館展示



竹管文・波状文